２０１７．３．２９　大草

読書メモ

50．梅村修一　「不祥事は誰が起こすのか」　日経プレミアムシリーズ（2014.1）

51．NHK放送文化研究所　「現代日本人の意識構造」　NHK出版（2015.2）

52.　岡田康子　「上司殿！それはパワハラです」　日本経済新聞社（2005.3）

53.　P・Fドラッカー　「ポスト資本主義」　ダイヤモンド社（2007.8）

54.　鈴木賢志　「日本人の価値観」中公選書(2010.1)

55.　森末伸行　「ビジネスの法哲学」昭和堂（2006.10）

56.　杉浦重剛　「教育勅語」勉誠出版（2002.10）

57.　岡本浩一　「無責任の構造」PHP研究所（2001.1）

58.　土井健郎・斎藤孝「「甘え」と日本人」角川書店（2010.1）

59.　田中康二　「本居宣長」中央公論新社（2017.7）

＜梅村修一　「不祥事は誰が起こすのか」から＞

この本は、不祥事が繰り返される原因を考察した良書である。

・ベイザーマン（ハーバートビジネススクール教授）は、その著書「倫理の死角」の中で、行動倫理学という新しい概念を用いて、企業が倫理的な行動をしたり、しなかったりする理由を明らかにした。事前には倫理的に振舞おうとしているにもかかわらず、多くのケースにおいて意図せざる非倫理的行動をとることがある。これを「限定倫理性」と呼び、実例で確認した。

・意図しない非倫理的行動をとる理由は、「動機づけられた見落とし」にあるという。別のインセンティブ（EX.収益や売上の増加）の存在や自由中心主義、現状維持、楽観的身びいきといった各種の心理的バイアスによって、時々の直感的判断が、事前の倫理的な判断から歪められること、また、事後的に気が付いたときも、それを正当化するように倫理基準や記憶を修正することがある。

・組織の場合には、そこに集団思考や組織文化の問題も絡んでくる。何が問題か明らかになって、なぜあのような行動をしたり、放置したのだろうかと一般の人が思うときでも、本人やその組織が必死に言い訳をし、結果として反省している風が見えないのは、必ずしも自分達が非倫理的な行動をしているという認識がないからだという。

・こうした「倫理の死角」を防ぐため、ベイザ―マンらは、以下の提言を行っている。

①何らかの行動の前には熟慮すること

②意思決定の際の動機を予め予測したり、予行演習したりすること

③できるだけ情報を開示し、複数の選択肢での検討を行うこと

④第三者の評価を重視すること

⑤組織に内在する「暗黙の価値観」を把握し、それに応じた独自のシステムを導入すること

⑥普段から仕事におけるプレッシャーを軽減すること

そこで求められているのは、倫理システもの構築や研修ではない。あくまで、自らや自らの組織における意思決定の正さという点での限界を踏まえた独自の対策である。

・なぜ、繰り返し不祥事が発生するのか？著者は以下の２つを原因としている。

①競争より協調を重んじる日本社会の風土があること。（協調を重んじるため、独占禁止法などへの関心が低くなっているのではないか）

②権威的勾配があるのではないか。（トップとトップ以外との権威勾配が急すぎると、粉飾又は破綻という大事故が発生するリスクが大きい）

⇒大草：「限界倫理性」が再発の元凶といえるのではないか。わかっちゃいるけどやめられない！！

＜白幡洋三郎　「花見と桜」（2015.3）から＞

・花見の定義：群桜、群集、飲食の３つが揃ったものが花見であると著者は定義づける。

そのような、花見があるのは日本だけである。桜は国花（菊も国花）である。

花見の特徴

①日本文化である

②集団で花見する内向きの文化である

③花見の酒は心を一つにするために飲むもの

④花見と桜は異なるもの。咲き方・散り方を日本人の生死の美学とする考えは、花見とは違う次元のもの。花見は桜に込められた精神性とは無関係の行事である。

（桜は、大和心や武士道などと桜が結び付けられ精神性を持つようになった）

⑤西行（1118年～1190年）が日本の桜を変えたという。

＜願わくば　花の下にて　春死なん　その如月の　望月のころ＞

＜森末伸行　「ビジネスの法哲学」から＞

この本は、正義や正しさは、絶対的なものでなく、社会の基本構造（経済、社会、環境）により変化するものであることを示した著書である。

・正義や正しさとは、一定の時空間に限定されて存立する相対的な事態である。

⇒限定された時空間、特定の社会においての正義や正しさは存在するが、どのような社会でも通用する絶対的な正義や正しさというものは存立しない。我々が取り扱う正義も資本制社会（私的所有権と市場経済システムを基礎とした社会）における正義である。

⇒資本制社会の基本となる所有権（自分のもの、他人のものの区別）、約束順守、人格・人権尊重などの構成事項を具体的に整理した上で、正義を考える必要があるという。

・平等にも２通りの考え方がある。

⇒努力・成果に応じて傾斜的に配分する「比例的平等」と絶対的に同じ質量を配分する「一律平等」である。どちらが、真の平等か。

＜岡本浩一　「無責任の構造」から

組織には、無責任の構造があることについて具体例を示し、その主原因は権威主義と属人主義にあり、その権威主義・属人主義を防止する手立てを解説している良書である。

・組織は、何らかの理由・原因により、結果に対する責任があいまいになる構造となっている。その最大の原因は、権威主義（教条主義、ファシスト傾向、因習主義的人格、反ユダヤ主義、自民族中心主義、形式主義）と属人主義にあるという。

・物事を単純化しすぎると皮相的な理解となり、正しい判断をすることの妨げとなるので注意が必要という。

・権威主義的な認知傾向は、複雑なものごとの認知能力の欠如と関連している。このため、認知的複雑性を高く維持することが、権威主義を防止することにつながるという。

⇒無責任な行動を許す構造となっている組織の中に、個人と組織は存在しているといえよう。コンプライアンス違反を犯す個人と組織の違反原因を個別に解明していくことが肝要である。

以上